

「国語の先生になる」というタイトルで、令和4年5月9日から「国語の窓」を出し始めた。今まで、「頼まれごとは試されごと」の如く、オーダーが入れば断ることもなく教員生活を送ってきた。その結果、教育書の原稿や、実践発表、研究論文などが累積されていった。

それらを、一度整理してみようと思ってから、だいぶ月日が流れた。そろそろ、とりかかろうと思ったが、一向に進まない。さて、どうするか。やめてしまうという選択肢はあった。だが、そうはしたくない。そして、思いついた。毎日、原稿をホームページにアップすることには慣れている。習慣化している。これを使おう。毎日、A4判の原稿を出す形なら、できるかもしれない。

というわけで、さほどの計画性もなく、「国語の窓」という形で、毎日、原稿という形で書いていった。令和5年3月20日の「一枚ポートフォリオの作成」で終了した。自分としては、そう思っている。だが、読んでいただいている方々にとっては、突然、終了した感は否めない。終了したかどうかはわからない。もう2か月も出ていないのだから、終わったのだらうと思っていただいているのではなからうか。

原稿をつくることで、自分の国語の授業を振り返ることができた。いったい自分は、どんな国語の授業をしたかったのか、どんな生徒になってほしかったのか。通常は、この2つが先にあるはずである。だが、私の場合は、そうではなかったように思う。そのとき、そのときで、どうにか授業を改善したい、何とか授業を活性化したいという思いから、授業のことを考えてきた。

それでも、自分の国語の授業には、幹のようなものがあることに気づかされた。それは、表現でできる生徒になってほしいという願いである。自分の言葉で、書いたり話したりできる人になってほしいという思いである。書くことは考えることであり、もちろん重要だが、特に、話したり、話し合ったりすることができるようになってほしいと考えていた。これは、日本の子どもの、日本人の弱点でもある。

書くこと、話すこと、話し合うことに力を入れてきた。だが、表現するには、考えをもたなければならない。考えをもつためには、読み解く力も必要である。すなわち、読解力と表現力は両輪であり、どちらも大切である。バランスの問題であるという結論に達した。

この結論は、ごくごく当たり前の話である。私の場合は、ここにたどり着くまでに、ずいぶんと長い時間を要した。その道のりは、若い国語の先生方にとって、何かしらの参考になるのではないかと考えた。灯台や羅針盤のようなものになればという思いである。うまくいったことは、世の中でよく見る。だが、うまくいかなかったことも含めて知ってもらったほうが参考になるのではないか。

「国語の窓」の原稿を整理してみたところ、けっして読みやすい順番にはなっていなかったことがわかった。そこで、もう一度、再構成してみた。結局、自分が国語の授業で、悩み、苦しんできた姿が浮かんできた。ただ、「これだ」という手だてを講じた結果、そのたびに授業が変わり、生徒が変わっていった事実は明らかにできた。そう考えると、「国語の窓」も、それなりに意味のあるアクションだったかと思える。国語の授業以外にも、振り返りつつまとめたいものがある。そのうち、気長に取りかかろうと思う。